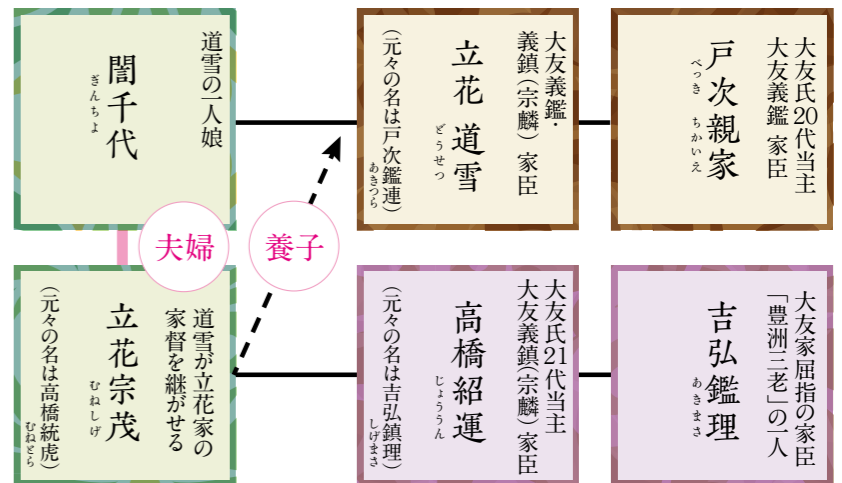




宗麟の時代を 生きた人たち

キリシタン大名として戦国の世を生きた大友宗麟。全盛期には北部九州6国を支配し勢力を誇りましたが、そこには有名無名に関わらず、多くの人々の支えがありました。今回は、大友宗麟の栄華を支えた武将や、宗麟と交流を持ち、彼が世界の国や文化に興味を持つきっかけとなった人物にスポットを当てました。さらに、大友家のお家騒動を重臣一家を通して描いた本格歴史小説『大友二階崩れ』で第9回日経小説大賞を受賞した作家・赤神諒さんのインタビューを掲載します。

今回の特集で登場する立花家・高橋家の関係図



※「理」を「ただ」とする説もあり

参考文献
『大分歴史辞典』大分放送大分歴史事典刊行本部
『立花宗茂と柳川の武士たち』柳川古文書館・公益財団法人立花財団立花家史料館
『歴史 REAL 女たちの戦国時代』梓澤要 執筆
『週刊ビジュアル戦国王 第96号』八木直樹・小和田泰経 執筆
『南蛮医アルメイダ』東野利夫 著 柏書房
『ふるさと鶴崎のくらしと歴史』鶴崎校区ふるさと七輪の街づくり推進委員会
『親子で読む大分偉人伝』辻野功 著 大分学研究会

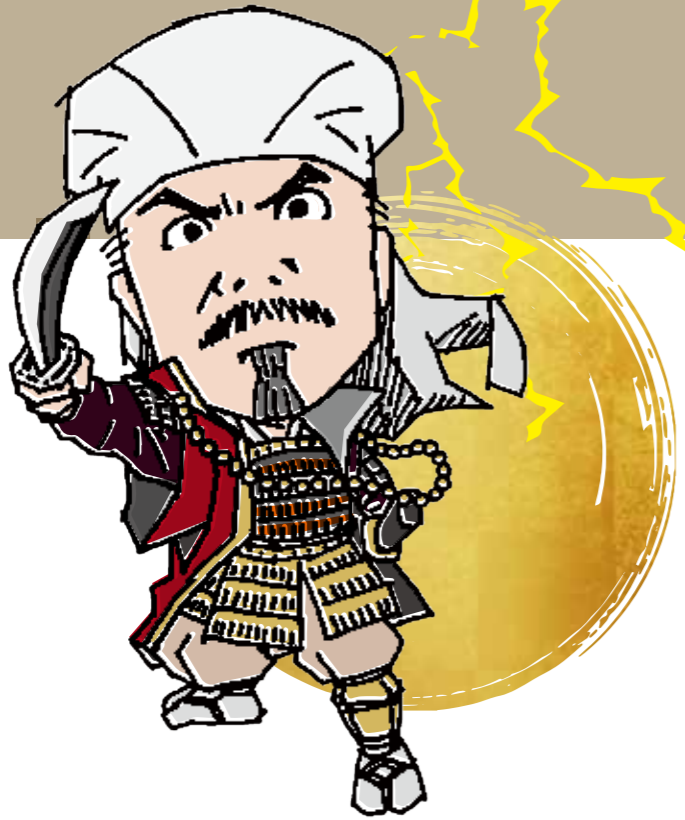
文化財課 ☎537-5639

宗麟に忠節を尽くし、栄枯盛衰を共にした武将

立花道雪

たちばな どうせつ
1513年〜1585年
(1516年誕生とする説もあり)

大友家の家督争い「二階崩れの変」以降、主君宗麟と共に乱世を生き抜きました。大友家最盛期の陰の立役者として、室町幕府にもその名を馳せた唯一無二の武将です。



我が主君、宗麟と共に

戦乱の世、周囲の情勢によって寝返る者が多い中、道雪は常に宗麟と共にあり続けました。道雪は、大友家の当主が下す重要事項の決定に関わり、決定事項を家臣に伝達する文書を連名で出す加判衆としても活躍しました。出家して名乗った「道雪」の名前の由来は、路傍の雪がその場で溶けていく様を、武将の忠節の在り方になぞらえたもの。主君と運命を共にする覚悟を決めていたからこそ、宗麟の間違いに對しては度々苦言を呈し、宗麟もまた道雪の言葉には耳を傾けていたことから、良きサポート役だったことがうかがえます。

大友家随一の武功を誇る

各地の反乱鎮圧はもちろん、毛利元就や龍造寺隆信など多くの強敵との戦いで活躍した道雪。敵が予期せぬ変幻自在の戦法を用いる策士ぶりで、その名を全国に知らしめました。武功を誇る道雪ならではの有名な伝説は、落雷を「千鳥」という刀で切りつけたというものです。これにより、この刀は「雷切」と呼ばれるようになりました(左写真)。落雷の影響で足が不自由になりますが、亡くなるその直前まで興に乗って戦場で指揮していたといわれています。大友家の繁栄に陰りが見え始めてもなお、宗麟と共に生き、人生の幕を戦場で閉じた道雪。以降も続く乱世を力強く生き抜いた一人娘の閻千代を育て、後に西国無双の武将とたたえらる立花宗茂を婿に迎える先見もまた、道雪の魅力だといえます。



脇差「無銘(雷切丸)」(立花家史料館所蔵)